

外国にルーツを持つ子どもたちの キャリアを育む事業

報告書

2017年9月

特定非営利活動法人多文化共生センター大阪



夢を、貧困につぶさせない。
子供の未来応援国民運動

目次

はじめに	3
1 事業の目的.....	4
2 実施概要	4
2-1 事業背景.....	4
2-2 事業内容.....	4
3 事業の考察.....	4
4 実施報告	5
4-1 大阪市西淀川区における外国人住民生活実態調査	5
4-2 日本語教室.....	6
4-3 キャリアセミナー.....	14
4-4 ビジネスマナー	16
4-5 報告会.....	18
おわりに	19

はじめに

在留外国人の数は年々増加しており、平成 28 年末の在留外国人数は、238 万人で過去最高となりました。また、日本語指導が必要な児童・生徒も年々増加しています。

そこで当センターでは、外国にルーツを持つ子どもたちの日本語運用能力を伸ばしながら、職業観や勤労感を育成する研修を通して、子どもたちが国籍、文化、言語を超えて、自身が持つ力を発揮できる社会づくりの実現を目的とし、本事業を実施しました。

人口減少社会を迎えた日本において、外国人住民や外国にルーツをもつ子どもたちも、日本社会を担う一員であることはいまでもありません。本調査が外国人住民の生活実態を把握し、外国人住民や外国にルーツをもつ子どもの課題解決や現状改善への取り組みを探る一助となれば幸いです。

本事業は子供の未来応援基金の支援を受け実施しています。

1 事業の目的

大阪市西淀川区に住む外国人住民とその世帯が置かれている状況を把握する。また、日本語運用能力を伸ばしながら、職業観や勤労感を育成する研修を通して、外国にルーツを持つ子どもたちが国籍、文化、言語を超えて、自身が持つ力を発揮できる社会づくりの実現を目的とする。

2 実施概要

2-1 事業背景

本事業対象地域である大阪市西淀川区は、大阪市内で最も南米出身者が多い地域である。しかしながら、外国人住民の生活実態については自治体も把握できているとは言い難い現状にある。

これら外国人住民は定住化が進んでおり、子育て中の世帯も多い。一方、日本語運用能力は高いとは言い難く、仕事や生活、子育てに様々な課題が見られる。また、不安定な雇用形態で働いている親が多く、そのため外国にルーツを持つ子どもたちは自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見付けにくいといった状況もみられる。

2-2 事業内容

- ・大阪市西淀川区における外国人住民生活実態調査
- ・日本語教室
- ・キャリアセミナー
- ・ビジネスマナーセミナー
- ・事業報告会の開催

3 事業の考察

本事業の実施にあたっては、人との繋がりが非常に重要なキーワードとなった。アンケート調査や日本語教室など、本事業では外国人住民たちの紹介や口コミにより人を集めることができたということがあり、当事者たちとの良好な関係性を構築していたからこそ、事業すべて達成させることができた。その意味で、本事業は人との繋がりがなければできなかったものであり、実施できたということはこれまでの活動の成果でもあったと感じている。

また、外国人住民たちの表面上の課題（漢字が難しい、子育てについて）だけではなく、事業を通して対話を何度も重ねたことにより、彼らが実際に直面しているより根深い課題（職場においての日本語など）についても明らかにすることができた。さらに、今回の事業では、外国にルーツを持つ子どもを含め、彼らの親へアプローチすることもできた。若い世代の親も多く、子どもと親の双方に働きかけをすることで、地域で孤立しがちな外国人世帯を見守り、サポートすることができたといえるだろう。

しかし、本事業ですべての課題を解決することができたというわけではなく、継続して外国人住民たちを支援する取り組みが必要であり、今後も持続可能性のある活動を目指していきたいと感じている。

4 実施報告

4-1 大阪市西淀川区における外国人住民生活実態調査

・概要

大阪市西淀川区内に在住する外国人住民を対象に生活実態を調査し、実態を解明、考察することを目的とする。また子どもの貧困についても焦点をあてた。

・調査の対象者

主に大阪市西淀川区内に在住する非漢字圏出身であり、かつ16歳～39歳の若年者で、就労に制限のない在留資格を持つ者（区内在住の外国人住民や外国人住民キーパーソンなどの協力を得て抽出）を対象とした。

・調査期間

2016年12月～2017年6月

・調査方法

質問紙調査（日本語版、ポルトガル語版、スペイン語版、タガログ語版を作成）にて調査を実施。通訳を帯同し、インタビュー方式により調査を行った。

・調査項目

①回答者の属性

年齢、国籍・出身国、性別、在留年数ごとのちがいを検証するため、当該項目を設置した。

②家族の世帯収入について

日本人住民との比較を行うため、平成28年に大阪市で行われた「大阪市子どもの生活に関する実態調査」と同じ、あるいは類似した質問項目を設けた。

③仕事について

外国人世帯の正規雇用・非正規雇用などの勤務状況を調査するため、質問項目を設けた。また、仕事に対する意識のちがいについて日本人住民との比較を行うために、平成23年内閣府が行った「若者の考え方についての調査（若者の仕事観や将来像と職業的自立、就労等支援等に関する調査）」と同じ、あるいは類似した質問項目を設けた。

④日本語学習歴・日本語能力について

日本で暮らす外国人住民が直面する課題の一つに、日本語の習得が挙げられるため、質問項目を設けた。

⑤子どもとの関係について

子どもを持つ外国人住民について、日本人住民との比較を行うため、平成 28 年に大阪市で行われた「大阪市子どもの生活に関する実態調査」と同じ、あるいは類似した質問項目を設けた。

・回答結果

回答者…65 人（42□世帯）

・調査結果

調査結果については「大阪市西淀川区における外国人住民生活実態調査 報告書」を参照。

・調査風景



4-2 日本語教室

・概要

当初の計画としては、日常会話はできるが、日本語の読み書きは苦手である子どもたちへ学び直しの場を設け、不十分と感じている日本語の技能を高めることを目的とし、日本に永住予定で、かつ非正規雇用で働く 16 才～20 才前後の外国にルーツを持つ青少年を対象に日本語の読み書きに特化した学習を行うことを予定していた。

しかし、実際に日本語教室を開講すると、当初予測していた対象であった外国にルーツをもつ青少年ではなく、子育てをしている親世代の参加者が大半であった。この要因としては、日本語教室の開講日が日曜日の午前中であったこと、また、子連れでも参加できる環境づくりを行ったことにある。当初計画していた対象者を組み入れることはできなかったものの、参加者の日本語レベルやニーズに合わせて授業構成を変え、より参加者にとって実践的な日本語を学ぶことができる教室にすることができた。予定では、読み書きに特

化した学習を行うとしていたが、今回の日本語教室に参加した学習者のほとんどが、日本語のひらがなやカタカナを習得していなかった。滞日年数が長くても、日常生活で外国人住民が日本語の文字に触れ学ぶ機会が少ないことが分かったことから、本教室ではひらがなやカタカナなど基礎の文字学習もできる授業構成となった。

・実施回数、時間

2017年4月～9月（初級・中級コース 月4回×6か月×2コース＝全48回）
毎週日曜日（10:00～11:30）

場所	出来島会館（大阪市西淀川区出来島1-11-5） （参加者は徒歩や自転車で通っていた）
参加者集め	多文化共生センターの担当者による声かけ 参加者同士の口コミ
日時	毎週日曜日 10:00～11:30
日本語のレベル設定	初級前半・初級後半（内容によって合同で行う） ※プレースメントテストでクラスを分ける
講師	2名（日本語教育を専門とする）
使用教科書	なし （毎回授業プリントを作成する）
参加者	ペルー人（子どもを持つ父母） ※子ども（1歳～高校生）も教室に来る
毎回の参加人数	2名～9名（子どもの人数除く）

出来島日本語教室を当初は、参加者は少ない状況だったが、（参加者約2名）、多文化共生センターの担当者の声かけと参加者からの口コミにより、回を重ねるごとに人数が増え参加者も定着していった。この要因については、教室がもつ以下のような特徴が考えられる。

- ① 子連れでも参加できる
- ② 日本語教室が憩いの場としての機能を持つ
- ③ 彼らの日本語ニーズを引き出し、それに応える日本語授業

以下、これらの特徴について詳細を記載する。

① 子連れでも参加できる

出来島日本語教室の参加者は皆、小さい子どもを持つ親であった。託児スペースや託児スタッフがいることで、子どもを連れて教室に来ることができ、また子どものことを気にせず日本語の勉強をすることが可能であった。日本語教室のドアは締め切らず解放していたため、時折、子どもが教室に入室し、ぐずってしまうこともあったものの、親が自由に席を立つことができ、子どもに対応できるといった環境作りが自然にできていたと感じる。このことにより、参加者の間で互いの存在に遠慮をせずに学習ができることが可能となっていた。

② 日本語教室が憩いの場としての機能を持つ

出来島日本語教室の人数が増え、定着した大きな要因としては、同じ国籍の人が集う憩いの場としての機能を日本語教室自体が果たしていたと考えられる。参加者の国籍は初回を除き、全員ペルー人であった。彼らは、長く日本に住んでおり、日頃は工場で日本語を使わない単純作業をしている。彼らの生活について聞いてみると、仕事と子育てに追われ、日本語を学びたくても学ぶ時間がないという現状にあった。日々時間に追われている彼らが、出来島日本語教室に通っている理由を考察すると、同じ国籍の人々が集まり情報交換をする場として、出来島日本語教室が活かされていることが明らかとなった。実際、授業が始まる前に参加者が集まってくると、一週間の出来事をお互いに話している光景がよく見受けられた。また授業後も同じく、生活や子どもについての情報交換を行っていた。このことから、出来島日本語教室が日本語を学習する場としてだけではなく、人々が集まる憩いの場としての機能も果たしていたことがわかる。

③ 彼らの日本語ニーズを引き出し、それに応える日本語授業

出来島日本語教室が始まった当初は、講師間でレベル別の日本語教科書を選定し、授業案を練っていた。しかし、最初は参加者も初めのうちは定着しなかったこともあり、積み上げ式の日本語の授業では上手くいかないことが明らかとなった。そこで、講師間で話し合いを行い、彼らのニーズを引き出せるような授業作りに切り替えることとなった。具体的には、レベル別に文型や語彙を導入し、フォームを理解することや語彙をきちんと覚えるということではなく、自分の伝えたいことを伝えられ、彼らの生活に必要なタスクをこなせることに重点を置いて日本語を教えるという方法を用いた。また常に授業の場では、質問があればそれにすぐ対応するといった形式をとった。それにより、予定していた授業内容はこなせないこともあったものの、参加者が知りたいと思う日本語は、おそらく彼らが必要と感じている日本語であるため、それがどのような日本語であるか知ることができたことは、講師にとっても貴重な情報となった。例えば、6月11日に行った日本語の授業（「職場での休みの取り方」）では、参加者から以下のような質問がなされた。

参加者「わたし、こうじょうで『あしたやすむ』いう、あのひと『カッテニキメルナ』
ゆった。いみなに？」

(働いている工場で「明日休む」と言ったら、上司に「勝手に決めるな」と言われた)

この日の授業は合同の授業であったため、日本語のレベルに関係なく、ある参加者の工場での事例を参加者全員に共有することができた。この「勝手に決めるな」という意味と、なぜ上司にそのように言われたのかを説明すると、全員が納得し、それ以外にも工場で言われたことや質問などが次々と出てきた。

このように、日本語の学習を通して自らの生活を振り返り、そこから質問が出てくるような授業作りが、彼らにとって非常に重要であることがわかった。講師の役割についても「教える」という立場ではなく、授業を進行し、参加者の言いたいことなどを「支える」ファシリテーターの役割を持つ重要性も、この教室の事例を通して知ることができた。また、参加者のレベルに関係なく授業を行う、合同授業の役割も参加者の経験に基づく日本語を共有できるという面から、その重要性は高いと考えられる。加えて、日本語のレベルが低くても、日本語がある程度分かる参加者が、他の理解が進んでいない参加者に対して母国語を使って教えている場面もあり、このような共に学べる教室という環境づくりも非常に重要であったと考える。

・各クラスの授業内容と様子（初級・中級コース 全48回）

回	日付	テーマ		参加者人数		託児
		初級前半	初級後半	初級前半	初級後半	
1	4月9日	・プレースメントテスト ・自己紹介	・プレースメントテスト ・自己紹介	2		0
2	4月16日	・プレースメントテスト ・自己紹介と目標共有		9		7
3	4月30日	・自己紹介 (名前、職業、出身、 趣味)	・自己紹介 (名前、職業、出身、 趣味、ペルー紹介)	2	2	2
4	5月7日	・自己紹介 (ペルー紹介) ・家族の呼称	・日常生活(行きます、 来ます、(場所)にいま す、(場所)でVます)	5	3	8
5	5月14日	・自己紹介、家族紹介		3		3
6	5月28日	・日常生活(場所の語彙) ・小テスト	・日常生活 (場所の語彙) 小テスト	4	2	6
7	6月4日	日常生活(1日の生活を日 本語で言う)	・日常生活 (1日の生活を日 本語で言う)	6	2	8
8	6月11日	・職場での休みの取り方		6		3
9	6月18日	・7月2日の発表会の準備 (ペルー紹介のポスター、発表文作成)		2		3
10	6月25日	・7月2日の発表会の準備、練習		6		4
11	7月1日	・7月2日の発表会の準備、練習		2		3
12, 13	7月2日	・発表会(日本語教室の概要、学習動機、感想、 ペルー紹介)		7		7
14	7月16日	・予定を話す	・予定を話す	2	2	1
15, 16	7月23日	・お祝いの言葉を言う→ パーティーに参加して実践		7		10

17	7月30日	・誘う、断る		3		3
18	8月6日	・誘う、断るの復習	・誘う（場所や時間について話す） ・形容詞	2	2	2
19	8月27日	・形容詞（な形容詞・い形容詞 分類）	・形容詞の肯定・否定（簡単なやりとり）	1	1	0
20, 21	9月3日	・料理教室（豚汁・お好み焼き）				
22	9月10日	・形容詞の肯定・否定（簡単なやりとり）	・事物の特徴を説明する（形容詞）			
23	9月17日	・感想を言う（今まで習った動詞・形容詞を使って、過去のことについての感想を言う）				
24	9月24日	・総まとめテスト（動詞、形容詞、職場における口頭能力）				

※子育て中（主に乳幼児を持つ）の参加者が多く、社会福祉法人西淀川区社会福祉協議会のご協力により託児スタッフを配置した。

以下、各コースの詳細を記載する。

・初級前半クラス

初級前半クラスは、日本語がほとんど話せない者や、単語を並べて簡単なやりとりができる者などを対象に開講したクラスである。基本的な自己紹介や日常生活に必要な語彙、短い会話の練習を中心に行った。ほとんど日本語が話せないとはいえ、日本での生活が長い者が多く、すでに知っている、あるいは聞いたことがある単語や表現もあり、それらの意味、用法を確認しながら授業を進めていった。

このクラスを実施する際に意識していたのは、ゆっくりと参加者の学習ペースに合わせるという点である。日本語学校とは異なり、いつまでに何を教えなければならないといった決まりもなかったため、参加者の負担にならないペースを意識した。一週間に1回しか

ない授業であったが、自己紹介や家族紹介、さらには日常生活について簡単なやりとりができるようになった。また、クラス内では特に文字についての指導は行わなかったが、毎回プリントや板書を読んだり、書いたりする中で、ひらがなが読めるようにもなった。

・初級後半クラス

初級後半クラスは、日本語で簡単なやりとりができる者を対象に開講した。簡単なやりとりができるといっても、ほとんど全員これまでに体系的に日本語を学んだことはなく、耳から覚えた限られた表現と知っている単語を並べて話すという者がほとんどであった。そこで初級後半クラスでは、身近なテーマについて、コロケーションと助詞を意識しながら授業を行い、すでに知っている知識を整理、発展させていった。また、耳から覚えた日本語は普通体がほとんどであったため、ビジネスや日本人との付き合いの場面を想定し、丁寧体や相手を不快にさせない表現などの学習も行った。丁寧体や相手を不快にさせない表現は簡単に習得できるものではないが、実際に起こり得る会話例を基に何度も練習を繰り返す中で、少しずつ相手を意識しながら話すことができるようになった。

学習態度の面でも変化がみられ、最初はほとんど全員ノートも鉛筆も持たずに教室に来ていたが、2回目以降はノートを持って来るようになり、回を重ねるごとにきちんと板書し、家でも復習をするようになった。教室は週に1回と限られているため、自分で勉強する方法を身につけていったことは、今後にもつながっていく大きな変化だったのではないかと考える。

・活動から見える日本語教室のあり方

日本語教室を行うにあたり一番重要なことは、学習者の方に継続して学習に来てもらうということである。出来島日本語教室では、毎回欠席者はいたものの、途中でやめることなく、全員が勉強を続けることができた。参加者が継続して学習に参加することができる教室運営において重要だと思われる点について、以下で順に述べる。

① 日時の設定

日本語教室に参加したいと思っている多くの人々は、平日や、人によっては土曜日など休日も仕事をしているため、平日開催の教室や土曜日開催の教室であると参加が難しくなる。地域によって、参加しやすい日時には違いがあるかもしれないが、重要なのは、勉強したいという人々が無理なく参加できる日時を設定することであると考えられる。

② 託児スタッフ／託児スペース

今回、参加者のほとんどが小さい子どもを持つ親であった。そのため、毎週託児ボランティアに来てもらい、子どもを預けることができる教室づくりを行なった。それにより、「子どもがいるから出かけられない」と言った理由で参加できない者がでないようにすること

ができた。また子どもを預けることで、集中して勉強に取り組むことができた。

③ 日本語教育専門の講師

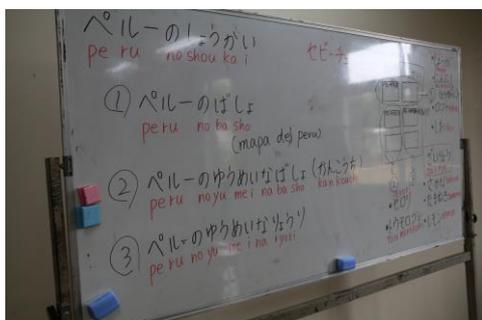
先述した通り、参加者が本当に必要としている日本語を教えるためには、既存の教科書に頼った授業をするのではなく、学習者のニーズを引き出し、出てきた疑問や質問を基に、体系的に生活に密着した日本語を教えていくことが必要であった。毎回、事前に教材の準備は行なったものの、授業中に参加者が生活の中で困ったことを思い出し質問をすることも多く、その場で授業を組み立て直すということもあった。

私たち教師側が「必要だろう」と考えている日本語と、参加者側が実際に「必要だ」と感じている日本語は必ずしも一致しているわけではない。出来島日本語教室では、参加者側のニーズを尊重して教えてきたからこそ、学ぶ意欲も継続されたのではないかと考える。このような授業方針、授業内容は、日本語教育の専門的な知識をもち、経験のある方で行うことは難しいのではないかと考える。

④ 臨機応変な対応

授業を行なっていると、託児ボランティアがいるとはいえ、子どもが泣きながら教室に入ってきたり、お母さんの隣に座って遊び始めたりすることもあった。また、参加者が授業に遅れるために、なかなか授業を始められなかったり、参加者の方の質問から授業の流れが変わり、準備してきた教材が全く使えなかったりしたという日もあった。しかし、どんなことが起こっても、「こういうルールだから」とこちらの方針に合わせて無理に進めるのではなく、参加者の方々に寄り添って、臨機応変に対応していくことが、参加者が日本語学習を継続するために重要なことではないだろうか。

・日本語教室実施風景



4-3 キャリアセミナー

・概要

本事業の対象である子どもたちの親や親戚、友人は工場のライン作業員の仕事に従事していることが多い。また、日本社会との接点も十分ではなく、自分の将来を考えるのに役立つ理想とする大人のモデルが見付けにくい。そこで本事業を通して、日本社会にある多様な仕事を知ること、職業観や勤労観を育成することを目指し、様々な職業の講師を招き、仕事についての話を聞いた。

・会場

出来島会館（大阪市西淀川区出来島 1-11-5）

・実施内容（全6回）

	第1回	第2回	第3回
仕事の内容	日本語教師	薬剤師	介護士
日時	平成29年4月27日(木) 17:00～17:30	平成29年6月1日(木) 17:00～17:30	平成29年6月15日(木) 17:00～17:30
参加人数	大人4名、子ども9名 合計13名	大人7名、子ども10名 合計17名	大人3名、子ども8名 合計11名
内容	・講師の自己紹介（出身地、学生時代について等） ・仕事の概要、一日の流れ ・子どもたちからの質問タイム	・講師の自己紹介（出身地、学生時代について等） ・仕事の概要、一日の流れ ・子どもたちからの質問タイム	・講師の自己紹介（出身地、学生時代について等） ・仕事の概要、一日の流れ ・子どもたちからの質問タイム

	第4回	第5回	第6回
仕事の内容	社会福祉士	アパレル販売員	テレビの制作
日時	平成29年6月29日(木) 17:00～17:30	平成29年7月13日(木) 17:00～17:30	平成29年8月31日(木) 17:00～17:30 (開催予定)
参加人数	大人5名、子ども13名 合計18名	大人7名、子ども7名 合計14名	大人名、子ども名 合計名
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・講師の自己紹介（出身地、学生時代について等） ・仕事の概要、一日の流れ ・子どもたちからの質問タイム ・アクティビティ「あなたの周りの人の困りごとを解決しよう！」 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師の自己紹介（出身地、学生時代について等） ・仕事の概要、一日の流れ ・子どもたちからの質問タイム ・アクティビティ「お客様のほしいものを当ててみよう！」 	<ul style="list-style-type: none"> ・講師の自己紹介（出身地、学生時代について等） ・仕事の概要、一日の流れ ・子どもたちからの質問タイム

・キャリアセミナー実施風景



・成果

大きな成果としては、キャリアについて考えることが少ない子ども達が、具体的な仕事の種類や内容について知る機会を持てたことである。キャリアセミナーの開催により、普段働くということ意識していなかった子どもたちが、様々な仕事内容について話を聞いたことにより、「働く」ということに興味を持つことができた。また、話を聞くだけでなく、実際に仕事を体験することができたセミナーもあり、体感的な経験ができた。子ども達にとって親や身近な人などから知らない話を聞ける貴重な経験にもなり、加えて、日本語学習の場にもなった。

また、ゲストスピーカーには地域で仕事をしている人を招いたことにより、地域において外国人住民と日本人住民の交流のきっかけにもなった。子ども達も地域で接している人々から仕事の話聞くことで、自分たちが住む地域にはどのような人がいるのかを知ることができた。このような地域の人々との交流の機会も、キャリアセミナーで持つことができた。

今回参加した子どもたちは小学校1年生から中学校3年生までの子どもであった。日本で生まれ育った子や、去年来日した子など、滞日年数や日本語力に差があった。講師によっては、外国にルーツを持つ子ども達の日本語レベルを超えた、専門的な学習レベルの日本語を交えた話をする事があったため、子ども達が難しい日本語についていくことができなかったということが課題として挙げられる。また、仕事の内容について重きをおいた話が多かったため、具体的にどのような進路を歩めばその仕事に就くことができるのか不明確となってしまった回もあった。

4-4 ビジネスマナー

・概要

日本社会における就職活動の際に必要なマナーや、ビジネスマナーのスキルを身につけること、また、自らの力で生き方を選択できるようなキャリア育成の形成に必要な能力や態度を身につけることを目的としたセミナーを開催した。

当初の計画では、今後日本に永住予定の非正規雇用で働く16～20歳前後の外国にルーツをもつ子どもを対象としたセミナーを開催する予定であった。しかし、調査を進めるにつれ、現在非正規雇用で働いている大人の外国人住民たちにビジネスマナーを学ぶことへ需要があることが明らかとなり、急遽計画を変更し、彼らのキャリアアップに有効となるセミナーを開催することとした

・会場

出来島会館（大阪市西淀川区出来島 1-11-5）

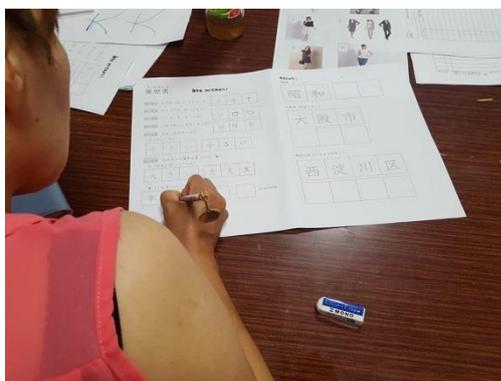
・実施内容（全6回）

	第1回	第2回	第3回
テーマ	電話	名刺	履歴書①
日時	平成29年6月4日(日) 11:30-12:30	平成29年6月25日(日) 11:30-12:30	平成29年7月9日(日) 10:00-11:00
参加人数	大人8名、託児8名 合計16名	大人6名、託児3名 合計9名	大人6名、託児4名 合計10名
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事を休むときの電話練習 ・丁寧表現 ・「～たいです」表現練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・「名刺」とは ・記載項目について ・名刺の渡し方練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・履歴書の書き方 ・漢字練習（住所、氏名、西暦等）

	第4回	第5回	第6回
テーマ	面接練習	服装	履歴書②
日時	平成29年7月9日(日) 11:00-12:00	平成29年7月13日(木) 15:00-16:00	平成29年9月実施予定
参加人数	大人6名、託児4名 合計10名	大人1名 合計1名	大人 名 託児 名 合計 名
内容	<ul style="list-style-type: none"> ・仕事の面接練習 ・志望動機、長所の言い方 	<ul style="list-style-type: none"> ・面接時における適当な服装とは ・面接時の服装練習 	<ul style="list-style-type: none"> ・履歴書を仕上げる ・履歴書を用いて面接練習

※子育て中（主に乳幼児を持つ）の参加者が多く、社会福祉法人西淀川区社会福祉協議会のご協力により託児スタッフを配置した。

・ビジネスマナー実施風景



・成果

一番の成果は、参加者の外国人がビジネスマナーを学ぶことにより、今の仕事からキャリアアップする道が開けたことにある。この事業の参加者の多くが、日本のビジネスマナーを学ぶ機会がなく、また、履歴書を書いた経験がなかった。これまでは、知人からの紹介により履歴書を必要としない工場などで働いてきたという参加者がほとんどであった。しかし、履歴書に必要な住所等を書く練習をしたり、模擬面接を行ったりしたことで、今までよりも幅広い職種に対して就職活動をすることができる可能性が広がったといえるだろう。なかには、自身の持つスキルを活かした新しい仕事を開拓したいと意欲を高める参加者もいた。また名刺の交換練習の際には、地域日本人住民にも参加してもらい交流することができた。その際に、個人で行っているケーキ作りやパーティーデコレーションなどのビジネスを、日本人にも知ってもらうことができたと話す参加者もあり、様々なキャリアアップの方法として、この事業で学んだビジネスマナーが今後も活かされていくのではないかと考えている。

自分が使用する日本語は丁寧なのか、正しい表現ができているのかなど、日本語を使うことにまだ自信を持ってない参加者も多い。参加者をエンパワメントしていくためにも、ビジネスマナーの練習回数を重ね、多くの日本人と接する機会を増やしていくことが大切である。また、ハローワークなどでの仕事の探し方を知らない参加者も多く、知人を頼るだけではない、仕事の探し方についてもレクチャーする必要があると考える。

4-5 報告会

・概要

当初の計画において、事業報告会は9月に行うことを予定していたが、7月に地域主催の多文化交流イベントがあり、そこで地域の人々の参加を見込むことができたため、計画を変更し、7月の上記イベントにて事業報告会を行った。

報告会では、日本語教室の学習者、キャリアセミナーに参加した外国にルーツを持つ子どもたちも登壇した。日本語を用いて人前で発表をする機会がない外国人住民にとって、このような場は貴重な機会であり、自身の日本語に対して自信を持てるきっかけにも繋がったといえるだろう。

・日時

平成 29 年 7 月 2 日（木） 11:00～11:30

・会場

出来島会館（大阪市西淀川区出来島 1-11-5）

・参加者

大人 20 名（一般、行政関係者、地域の方等）

・報告内容

「大阪市西淀川区における外国人住民生活実態調査報告」

報告者：特定非営利活動法人多文化共生センター大阪 スタッフ 佐藤千佳

「キャリアセミナー実施報告」

報告者：特定非営利活動法人多文化共生センター大阪 スタッフ 小野杏奈

キャリアセミナーに参加した外国にルーツを持つ子どもたち 2名

「日本語教室実施報告」

報告者：日本語教室講師 藤井瑠美・米澤千昌

日本語学習者 7 名

・報告会実施風景



おわりに

本事業は、西淀川区在住の外国人住民の方々、また地域の日本人住民の方々のご協力なしでは実施することができませんでした。ご協力いただきました皆様へはこの場を借り、感謝申し上げます。

この先、外国人住民の人口が増加することが予測されている今の日本社会において、多文化共生社会を実現することは外国人住民だけでなく、日本人住民も生きやすい社会になることに繋がります。本事業を通じて得ることができた新たな知見は、今後の活動へ活かしていくだけではなく、多文化共生社会実現のための一助となることを願っております。

2016年度 子供の未来応援基金

未来応援ネットワーク事業

**「外国にルーツを持つ子どもたちの
キャリアを育む事業」報告書**

発行日

2017年9月

発行者

特定非営利活動法人 多文化共生センター大阪

〒532-0023 大阪市淀川区十三東 2-6-7 徳島ビル2階

TEL:06-6390-8201 FAX:06-6195-8812

URL: <http://www.tabunka.jp/>

E-Mail: osaka@tabunka.jp